

白山人類学研究会創設の思いと松本誠一先生との30年

著者	立柳 聡
著者別名	TACHIYANAGI Satoshi
雑誌名	白山人類学
巻	23
ページ	1-5
発行年	2020-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00011609/



《巻頭言》白山人類学研究会創設の思いと 松本誠一先生との30年

立 柳 聡*

Preface: The Thoughts of the Founding Hakusan Society of Anthropology
and 30 years of Walking with Prof. Matsumoto Seiichi

TACHIYANAGI Satoshi*

私が明治大学大学院で博士前期課程を終え、東洋大学大学院社会学研究科博士後期課程に進学したのは、1990年4月のことであった。この月の下旬が、松本誠一先生にお会いした最初の機会であったと思う。以来、信じがたいまでの速さで30年の歳月が経過しようとしている。振り返るほどに走馬灯のごとく、先生との忘れがたい様々な思い出が蘇ってくる。それにしても原点にあるのは、白山人類学研究を立ち上げ、切り回した頃のものだろう。

東洋大学に移った私は、高橋統一先生のゼミや社会学研究科院生共同セミナーなどの大学院の催し、AA研（アジア・アフリカ文化研究所）、白山社会学会などを通じて、その後どんどんと多くの仲間や先輩方との知己を得ることになったわけだが、人類学、社会学といった分野の院生がほんのわずかしかなかった明治大学の大学院とは正反対なまでの雰囲気を入學早々から味わい、とても感激したことをよく覚えている。

それだけに、一つ決定的な違和感を実感したことも事実であった。高橋先生のゼミが終われば容易に散会してしまう院生や卒業生の仲間たちの淡白な付き合いに、どこか危機感のような不安を抱くまで、入学から一月もなかった。“この仲間たちで学び合い、切磋琢磨できれば、皆々一段と発展できるはずだ。” そうした思いが日に日に強くなっていった。

思えば、明治大学の人類学は、1981年、蒲生正男先生の急逝を受けて、長い混迷期に入った。学部学生だった自分も進学の道を閉ざされて、人生迷走の時期を過ごすことになったわけだが、状況打開の展望が見出せない中、一筋の光明が射した。蒲生先生の下に集い、大学院で学ばれていた先輩方が、1985年4月、やがて「ふいんど社会人類学研究会」と名称は変わったが、「明治大学社会人類学研究会」を立ち上げ、周囲の関係者も巻き込みながら、定例研究

* 公立大学法人福島県立医科大学看護学部 ; School of Nursing, Public University Corporation Fukushima Medical University, 1 Hikariga-oka, Fukushima City, Fukushima Prefecture, 960-1295, Japan / tachiyan@fmu.ac.jp

会の開催や研究誌『ふいど』の刊行を中心とする研究会活動を開始されたのだった。ここに、赴任前の植野弘子先生や松本先生同様、韓国の研究を専門とする朝倉敏夫先生など、その後幾多の業績を積み上げ、今や学会にその名を知られる教授、名誉教授の先生方のお若い姿があった。そして、朝倉先生のお誘いを受けて、自分もメンバーに加えていただいたのである。故郷に帰ってきたような喜びがあったが、「自由な雰囲気の中で自由に討議する場」とはいえ、当時の私には、宝石の原石であったこうした先輩方の研究発表に反論はおろか、質問の一つもぶつけられる力はなく、毎回ひたすら耳学問に終始するしかなかったこと、加えて、研究会終了後の懇親会の居心地の良さと四方山話の刺激が忘れられない。

こうして今なお尊敬の対象であり、目標である先輩方によって蘇る力を与えられた私は、大学院に席を確保し、学部時代に描いていた将来展望の軌道に戻ることができたのである。

この結果、明治大学大学院の社会学、人類学関係者の合同ゼミでもあった明治大学社会・人類学会の定例研究会やその後の懇親会でも、よく似た経験を積み重ねることになった。

“恩師を中心としたゼミとは違った、しかし、とても重要な意義が先輩、同輩、後輩、同士が集い、研鑽する研究会にはある…”

なるほど、こうした確信的な悟りが、進学間もない東洋大学の大学院で、私に危機感のような不安を抱かせたのであろう。否、“これは宝の持ち腐れではなからうか。”そうした心の中のつぶやきには確かな記憶がある。“自分が立ち上がろう。”院生、卒業生を中心に、学内関係者を主要なメンバーとして視野に置く研究会の設立の呼びかけを開始したのは、1990年5月連休明けの頃からであった。この年度当初から、高橋統一先生の指導の下、招集を受けた大学院生と卒業生が、三重県鳥羽市今浦におけるフィールドワークを行うこととなり、既に顔を合わせる機会が増えていたので、まずはこの顔ぶれに相談を持ちかけた。今や韓国を代表できる民俗学者の一人である金美榮さんや島嶼コミュニティ学会の前・副会長、對馬秀子さんなど6名がその人々である。前例にないことに懐疑の声も微妙にあったのだが、次第に設立の潮流が生まれ、会の趣旨や規約、運営体制の素案作りが進み、研究会の輪郭ができあがっていった。しかし、若輩、無名の院生や卒業生ばかりの会では、対外的なインパクトは弱く、その人の名前と共に存在をアピールできる中心が必要であった。高橋先生では大物過ぎ、ゼミの番外編の印象も強くなる。“御大にはあえて遠巻きに見守っていただき、もう少し身近で親しみのある方に代表をお願いできれば…、東洋の生え抜きでもあり、先輩であり…やはり松本先生こそが適任者だ！”因みに、高橋先生は、私ども院生に、「何かあったら、松本くんに相談しなさい。いろいろ言っているから。」そうしたことを言われていた。もはや話の持って行き先は明白であった。そして、松本先生も好意的に受けとめてくださり、研究会の発足に向けた基盤が出来上がったのである。

先生のご意見を心得て素案の修正が進む中、「白山人類学研究会」の名称も浮上して、設立の

動きは加速した。鳥羽市今浦での夏の調査が終わるのを待って、9月発足の目処となり、白山人類学研究会はスタートラインに立ったのだった。

思えば、以来30年、松本先生といくつかの研究会をご一緒させていただいたことか。その折々で、「たたき台を作っては松本先生のところにお持ちして手直しをお願いし、いざ、実行！」このパターンの原型は、おそらくこの時にできたのである。

10月から月例研究会が始まり、松本先生の最初の登壇は、年内締めくくりの3回目となった12月の月例研究会であった。「世界の人類学：1988年度国際人類学・民族学会議資料を通じて」と題して発表され、現代的な課題を扱う研究や、社会問題に対する応用人類学的なアプローチが世界的に増大しつつあること等を伺って、印象を強くした。

ところで、研究会設立30周年というせっかくの機会であるので、白山人類学研究会の設立に向けた素案づくりの中で、言い出しっぺの私が特にこだわった趣旨と私の目に映っていたその後の展開をご紹介しておきたい。大きくは三つある。当時の私にとって、自分を育ててくれた「明治大学（ふいんど）社会人類学研究会」が持つ「自由な雰囲気の中で自由に討議する場」、「懇親会を通じたもう一つの学び」という研究会のあり方は、どうにも揺るがしがたいものだったのである。この頃、本家の研究会が潰えようとしていたこともあり、第一の思いは、そうしたポリシーを受け継ぐ場を是非とも構築することだったのである。特に後者をめぐるのは、定例研究会が始まった当初、“ただ酒を浴びているのではない。大いに飲み、語り、刺激しあう中に存在する大きな学びの意義に目を向ける！”を仲間たちに悟ってもらうことに腐心したが、次第に定着していったことが懐かしく思いだされる。それは、取り分け石井隆憲先生や私の役割だったのかもしれない。

第二は、「明治大学（ふいんど）社会人類学研究会」で、先輩方が私に対して施して下さったことの恩恵を、多くの後輩や関係者にも広めていくことであった。すなわち、人生どん底状態の私を受け容れ、見放さず、励まし、学ぶ機会を与え続けて下さった先輩方のお陰で自分は立ち直ることが出来たのである。“個々の人間に潜在している可能性を安易に見限ってはいけない。否、それを磨く支援が大切なのだ。”私の不動の悟りとなった。そこで、完成度の高い研究成果ではなく（そうしたものは『民族学研究』など、学会誌に投稿したり、学会大会で発表すればよい！）、そこに迫る手前の試行錯誤段階を持ち込み、活発な質疑応答や議論を通して、研究の完成度を高めていけるようなアイデアやサジェスションを多々掘り起こし、「発表者を育てる形成的評価の場」としての定例研究会や『白山人類学』の編集を実現させたいと切望したのである。なるほど、『白山人類学』は、当初、現在のような査読体制はなく、人によっては、掲載論文等の精度が担保されていないと思われる雑誌であったのかもしれないが、私を含め執筆者たちは、“やがて輝いていきたい。”という強い思いを抱き、その時の全力を尽くして論考をまとめていたとしみじみ思う。実際、私もそうであったが、それ

らがやがて博士学位論文に吸収されていった例は少なくない。もちろん、一度活字になれば、必ずや高橋先生の目にとまり、厳しい指導が待ち受けている背水の陣も本当だったが…

第三は、多様な関係者の出会いと交流の場を増やすことであった。すぐれて個人的な経験則ながら、これが新たな研究のアイデアやそれを推進する母体となる集団を生み出し、研究の活性化と進歩を促すという確信を抱いていたからである。実際、定例研究会は、やがてそれぞれの仲間の伝で新たな発表者を増やし、そうした理想を実現させていったと思う。例えば、白山人類学研究会が発足した翌年、1991年、松本先生が先鞭を付けられた八丈島での研究に、對馬秀子さんや当方などが足を踏み入れ、「八丈島研究会」が誕生した。島嶼学会や八丈島の在地の研究者との交流も広まり、今日まで四半世紀に及ぶ研究活動が続いている。また、2009年には、科研費の助成も得て、この研究会の主力メンバーによって、「奥会津研究会」が誕生した。そして、こうした動きを統合するかのように、2010年には、「島嶼コミュニティ学会」が船出したのである。

それにしても、白山人類学研究会の創設以降この30年を振り返るほどに、いろいろな研究組織やプロジェクトを立ち上げてきたものだと我ながら思う。しかも、押しなべて松本先生に頭に立っていただき、あれこれとご指導賜ってきたのである。そうした松本先生とのかかわりの中で、私に限らず、おそらくお供させていただいてきた多くの仲間がしばしば尊敬の念を抱いてきたのは、寡黙でありながら、常に大局を見て、押さえどころをしっかりと把握され、大切な記録はしっかりと残している先生の気配りやそつの無い行動であると痛感する。わからなくなっても先生の手元にあるデータで事なきを得たことがどれほどあったことか…

その昔、私は、高橋先生に、「きみはオルガナイザーだ。」と評していただき、恐縮した。なるほど、あれこれ目標を掲げては人やものを組織して実行に踏み出すことが好きである。典型的なP（パフォーマンス）型リーダーだと自分でも思う。しかし、このタイプにありがちなのは、人間関係に対する気配りや中庸さを欠いた行動に走りがちなことである。そういう危うい自分がやってこられたのは、背後に常に松本先生がおられ、そのご指導があったからに間違いはない。先生に心からの感謝を申し上げると共に、今後とも諸々の組織と活動に対するご指導を心よりお願いしたい。